

「立命館大学実践教育学会 第4回研究大会」を開催しました

(立命館大学教職大学院第3回教育実践探究フォーラムと合同開催)

テーマ 「コロナ感染拡大のもとでの子どもの生活、学校の役割
—指導・支援・ケア、つながって生きることの意味を問う—」

2021年2月20日(土)に立命館大学実践教育研究会第4回研究大会は立命館大学教職大学院第3回教育実践探究フォーラムと合同開催しました。

研究大会は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から会場に集合して対面での大会開催ではなく、ZOOMによるオンライン形態での開催となりました。そのため、遠隔地からの参加者も多く、学内外含めて約120名の方々からの参加申し込みがありました。

実践研究 報告会

13:00 ~ 14:15

教職研究科の3コースから各々院生の発表を行いました。

①臨床教育コース：河本真成

「自己実現的姿勢の獲得を目指した別室登校生徒への支援—教室と「別室」の居場所感覚の比較を通して—」

②教育方法・学習科学コース：中村太郎

「数学教育における反転授業の効果—深い学びを捉える3つの観点からのアプローチを通して—」

③国際教育コース：石田あきら(現職院生)

「フォロワーシップ教育による学級づくりの実践とその課題」

講演会

14:30 ~ 15:30

折出健二先生(愛知教育大学名誉教授、元同大学副学長)に「コロナ感染拡大のもとでの子どもの生活、学校の役割—指導・支援・ケア、つながって生きることの意味を問う—」と題して講演をしていただきました。コロナ禍の子どもたちと学校の役割を視野において、他者とともに生きること、アザーリングの重要

性をお話していただきました。コロナ禍では3つのC(care, concern, connection)が重要視されること、また他者関係におけるケアしケアされる関係だけではなく、一人の中にあるケアしケアされる関係性も示していただきました。他者と出会い、つながり、生きることの意味を参加者の皆さんと共に探る趣旨で様々な角度から講演いただきました。

シンポジウム

15:40 ~ 17:00

シンポジウムでは、春日井敏之(立命館大学教職研究科教授)をコーディネータのもと東京都世田谷区立赤堤小学校の堀江理先生からは勤務先での児童へのアンケート分析結果から「コロナ禍において子どもが何を求めているのか」「子どもが何を考えているのか」ということについてこれまで以上に考えていく必要があるという課題を提示いただきました。立命館大学産業社会学部/人間科学研究科教授)中村正先生からは、専門分野である社会病理学の見地から「Stay Homeの現実」「最近の事件の紹介」「考えてみるべきことや先送りしてきた問題」を解決していくためのヒントを示唆いただきました。今求められるのはsocial distanceではなく、social connectingであり、physical distanceであること、社会的孤立をいかにして防ぐかということが述べられました。

最後に、閉会の辞として荒木研究推進委員会委員長よりまとめの挨拶を行いました。

なお、本企画の「講演会」「シンポジウム」につきましては、立命館実践教育研究第3号にて掲載(2021年4月30日発行予定)します。